

ほんのしるべ

書標

2016.
7月号

2016年7月5日発行(毎月1回5日発行)
通巻452号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可





香港 ビーチサイドブックストア

ノセ事務所
能勢 仁

ビーチサイドブックストアは香港島の裏側に当たる赤柱半島のスタンレーマーケットの中にある。香港といえば、香港島の中心地銅羅湾か九龍地区を指すのが一般的である。ところがここというスタンレー地区は香港島の中心地から山越えをして出会う南岸の地域である。四国の高松松山の北部地区から高知に出る感じに似ている。観光でも余り多くの人は訪れないので、開発がおくれ、それだけに自然が残っている。別荘地になっている地区もある。

ビーチサイドブックストアは中心商店街の中にあり、店は二階にある。専門書こそないが、避暑地にぴった

りの洒落た書店である。陳列がよい、品揃えがよい、愛想が良い店である。こどもの本売場は特に優れている。売場そのものがこどもの広場であり、書店にいいのか幼稚園にいるのかと錯覚してしまう。育児遊具が豊富で、お母さん方を安心させている。絵本、おもちゃ、ゲーム、雑貨、文具、幼児の育児本の品揃えは、親たちに安心感を与えている。料理本、健康書、自己啓発書、雑誌、小説、ノンフィクション、文藝、伝記書、記録文学等の品揃えがよいので、安心して買ってしまう。避暑地を味方にした書店である。



7月21日 くもり時々雨

玄関の脇に植えておいた小さな薔薇

「雪明リ」が咲いた。うれしい。小さな

山野草も元気に咲いている。どちらも小

さな花火のよう。夜はまた花火をする。

子供たちは毎日でも花火をしたがる。

『食記帖』細川亜衣著（リトルモア）より



もくじ

世界の本屋さん 55

「書標」歳時記△7月▽

著書を語る(53) 「民主主義ハ面倒クサイ、

ダガ、然レバコン」

福嶋 聡

1

書標・書評 『物語戦略』ほか

特集 芸能の力

「憲法」と「日本のいま・これから」

今月のおすすめ

社会科学 18 コンピュータ 20

自然科学 21 医学書 22

人文科学 23 文学・文芸 24

文庫・新書 25 芸術 26

実用書 27 地図・旅行書 27

語学・辞典 28 児童書 29

インフォメーション 30

本屋くらばなし 「浅く広くそして好奇心は尽きず」

※表示価格はすべて本体価格です。

「民主主義ハ面倒クサイ、ダガ、然レバコソ」

福嶋 聡



六月に上梓させていただいた『書店と民主主義』は、二〇一四年後半から二〇一六年初頭にかけて、人文書院公式サイトの連載コラム「本屋とコンピュータ」など、いくつかの媒体に寄稿した文章を収録、再構成したものです。

前著『紙の本は、減びない』（ポプラ新書 二〇一四年）が、キンドルの「上陸」と共に「紙の本↓電子書籍」を必然とする噂伝された風潮に何とか対抗しようとしたものであるのに対して、本書所収の文章では、「ヘイトスピーチ」や「民主主義」など、現代社会、政治の現実に関する話題が中心となっています。書店や出版社の廃業・倒産、取次の危機や破綻と、販売総額が落ち続ける出版・書店業界の危機的状況は、止まることなく進行しています。「電子書籍化」への安易な期待への批判は、今なお僕の中で大きなモチーフです。

一方で、経済破綻、政治の迷走と、出版を取り巻く社会全体が不安と不満に覆われています。多くの反対者のデモを尻目に、「安保関連法案」が深夜に強行採決されました。イスラム情勢は全く先が読めず、欧州の混乱に終わりはなく、世界中でテロ事件が続発しています。

身近な出来事でいえば、二〇一四年末からジュンク堂書店難

波店で開催していた「店長本気の一押し！『NOヘイト!!』」に対するクレームを、ぼく自身何件も受けたし、昨秋には丸善&ジュンク堂書店渋谷店での「自由と民主主義を考える五十冊」フェアが、ツイッターの「炎上」をきっかけに、中断を余儀なくされました。

時代と書店現場が、共振しています。出版が、時代状況に拠って立ちながら逆にその状況そのものにコミットしていく営為なのだから、それは当然のことかもしれません。

「講演での福嶋聡は、電子に比べて紙の本はこんなふうに強いのだと明快に語って見せたわけではなかったが、あまり論理的じゃないが自信はあるのだ、と言いたげだった」

『紙の本は、減びない』の元となったほとんどの講演を、石橋毅史さんが『本屋』は死なない（新潮社）で実にうまく表現してくれています。実際、ぼく自身今でも、「紙の本」が絶対に減びないこと、更には減びるべきではないことを、論理的に説得力ある根拠をもって証明できたとは思っていません。『紙の本は、減びない』という宣言は、減びてほしくない書店人が、「予言の自己実現性」に期待をかけて放ったプロバガンダともいえます。

論理的な証明の困難を悟ったぼくは、無意識のうちにカントの響に倣ったのかもしれない。「証明」から「要請」へと、即ち「紙の本は、滅びない」ことを「民主主義」が要請する。と。但し、ぼくは、「民主主義」が至高の制度だと思っている訳ではありません。より正確に言えば、「民主主義でありさえすれば良い」「民主主義のもとでの決定に誤りはない」とは考えていない。「民主主義」が絶対であり、それに「反する」行為はすべて悪だと排除し、とりわけ多数決による決定が「正義」であるとする姿勢には決して与しない。多数の意見が誤ることはままあり、大切なのは常に誤りの可能性を想定し、誤つたら改める態度だ、と信じている為です。

「民主主義」はそもそも「正義」ではない、と言えます。「民主主義」に、こうあるべきという具体的、絶対的な公準は無い。「民主主義」とは、誰もが自分の意見を持ち、表明することを保障されるということ、そして他の人が意見を持ち表明することを、それがたとえ自らの意見と正反対のものであっても尊重する姿勢だからです。「民主主義」とは、様々な意見が飛び交い、互いに批判し合いながら、共生しいいこうとする姿勢そのものを言うのであり、ぼくにはそれが、多様な思想を持つ著者たちの考えが詰まった多くの本が所狭しとひしめきあう書店の店頭、限りなく似ていると感ぜられるのです。

多様な考えのすべてを保障する「民主主義」は、とてつもなく面倒くさいものです。共生のためには、気の遠くなるような説得が必要だからです。それゆえ、往々にして「民主主義」を標榜する人びとが、自らの意見を「正義」として振りかざし、他の意見を圧殺しようとし、「民主主義」そのものを破壊して

しまうのです。「民主主義」は、その本性上、脆弱なのです。だが、そんなにも面倒くさく、脆弱な「民主主義」であるからこそ大切にしておしまなければならない、とぼくは信じます。芝居三昧の日々を送っていた若き日々、ぼくがとても世話になり、尊敬していた先輩が、植田功さんでした。唐十郎に心酔し、自ら劇団も立ち上げた植田さんは、病に斃れる数ヶ月前まで、舞台上に立ち続けました。口が悪く、時として暴力的でさえありましたが、面倒見がよく、小さな身体に芝居への（時に革命への）情熱をみなぎらせ続けた植田さんは、終生芝居仲間慕われ続けました。

厳しく若手を指導するときの植田さんの口癖が、「面倒くさかったら、芝居なんぞやめてしまえ！」でした。

芝居づくりは、面倒くさい。書店の仕事も、面倒くさい。「民主主義」も、面倒くさい……。面倒くさいからこそ、いとおい。面倒くさいからこそ、大切にしなければならぬ。

二〇一二年の暮れに七十年の演劇人生を全うして鬼籍に入った怪優・植田功に、本書を捧げます。



『書店と民主主義』
人文書院・1,600円



『物語戦略』

岩井琢磨・牧口松二著

日経BP社・一六〇〇円

本書は、競争優位を勝ち取るためにイノベーションなどと並んでシンボリックなストーリーを経営資源としてとらえ、うまく活用している実際の事例を紹介し、モデル化し提示している。

本書の中心概念であるシンボリックストーリーとは①企業の強みを象徴、②企業の戦略方針に合致、③思わず人に話したくなる、この三つを満たすものとして定義される。実例として登場するのが近大マグロであり、ボルボであり、ヴィトンであり、ノードストロームなどである。フレームワークを知っていようと、単純にマネが出来ないのがこの戦略の特徴であり、その企業独自のストーリーが必要になる訳だが、本書が興味深いのは、どのような企業であってもストーリーを創りだす事が出来るという点、さらにそれと終わず、具体的にそれを可能とするためのフレームワークを提示している点

にある。これらが顧客価値、競争優位性、儲けの仕組みを高めるのだ。

経営戦略とストーリーを結びつける試みについて近年少なからず書籍が刊行されている。楠木「ストーリーとしての競争戦略」(東洋経済新報社)は多くの読者を獲得したことも記憶に新しいし、川上徹也「ずっと売れるノストーリー」(日経ビジネス人文庫)なども文庫化された。本書も経営学の専門書にあって一般的に賛同を得やすい内容だろう。また、登場するエピソードはどれも興味深く、一度や二度見聞きした事のあるものがほとんど。これらの事実がまた本書を説得力のあるものになっている。雑学的に読むというスタンスでも面白い。(清)

『あの素晴らしき七年』

エトガル・ケレット著 秋元孝文訳

新潮社・一七〇〇円

「わしは人生を愛しとる」

ホロコーストを生き延び、回復しようのないがんに侵されながらも力強い希望を失わずに生きた、ケレットの父の言葉である。

本書の舞台は戦時下のイスラエル。テ

ロのさなかで息子の誕生を迎えたユダヤ人作家ケレットは、父の死が訪れるまでの七年間を自伝的に綴る。

「もし人生の質が良ければそりゃ結構。質が悪けりゃ、それはそれで仕方ない。えり好みはせんよ」

舌と喉頭の切除を進んで選択し、クオリティオブライフなどなんだと言わんばかりに前を向く父。そんな父の生き方と、ケレット自身が父となったことが重なり、彼の〈素晴らしき七年〉を構成しているように思われた。

本書で描かれた、それぞれわずか三、四ページからなる三十六篇のエッセイは、どれも家族への温かな愛とユーモアに溢れるものだ。しかし、同時に語りの背景に存する過去・現在・未来を通して切り離すことのできない戦争の記憶と暴力の歴史が、もどかしさを伴いながら残酷な冷たさで心を刺しもする。

非日常が日常化していることの異常さを、幼い息子・レヴはまだ知らない。いづれ直面するであろう現実を噛み砕き、〈素晴らしき七年〉は過ぎていく。

ラストの一篇、ミサイルの降る道路脇で、身を屈めて「バストラミ・サンドイツ

チゴっこ」をする一家の姿に、オペライエンの『本当の戦争の話をしよう』を思い出した。

戦時下のリアル、人生を愛するということについて、時に笑い、時に泣きながら考えさせられる一冊である。(夕)

『村に火をつけ、白痴になれ』

伊藤野枝 著
栗原 康著 岩波書店・一八〇〇円

大正時代を生きた彼女が現在を見てもきつと叫ぶだろう。

『習俗打破！ 習俗打破！』
アナキストで、ウーマンリブの元祖といわれる伊藤野枝だが、彼女の言葉は性差の問題というよりも、もっと根本的なことを問いかけてくる。

「私はこう生きる。あなたはいつたいどう生きたいのか。」

本書を読むと、本当に思うままに、なんとかなるで生きている。まさにわがまま上等だ。すると必ず「周りの人の迷惑が……。」とくるのが世の常、というか当然である。しかしここで、野枝の言う「フレンドシップ・友情」である。互いに分かり合えない、個人同士であるから

こそ、やさしさをふるまい、思ってもいなかったよろこびや力を手にするのである(嫌なら他の人とのつながりをつくってゆくしかない)。

こだわりたいのは、そんな小さなことではない。やりたいことをやる。許したくないものは許さない。愛したいものを愛そう。そのためだったら遠慮なく誰かの手を借り、できるならば私の手も貸そう。

勉強ができ、本もたくさん読んだ野枝。様々なものを感じながら、自分の腹の底から出てくる言葉を武器に戦ったのだろう。その生き方は、変化の時を生きる私達にも見習うべきところが多い。(佐)

『1941 決意なき開戦』

堀田江理著 人文書院・三五〇〇円

誰も望んではいなかった。誰も、勝てるとは思っていなかった。そのような「戦争」を、なぜ日本は始めてしまったのか？

終始優柔不断な姿勢で日中戦争の泥沼化を防げなかった近衛文麿はもとより、国際連盟脱退演説で一躍「国民的英雄」となった松岡洋右や、「主戦派」の先鋒と目されがちな東條英機もまた、最後まで

で避戦への希みを胸に秘めていた。

だが、陸軍大臣を兼務する東條は、それまでに犠牲となった「英霊」の死を無駄にはできない。誰よりも対米英戦争の可能性を憂慮していた昭和天皇は、同時に陸海軍の大元帥であった。

軍隊は、「必敗」と思われる戦争でも、決して「戦えぬ」とは言えない。「政府がきめたのだから、仕方ない」となる(だから、軍隊を持つてはいけないのだ)。

一方陸海両相を含む政府は、陸軍出の首相の下、軍隊の論理を拒否できない。

果たして皮肉にも、対米英戦の勝利の不可能を見抜いていた「戦術の天才」山本五十六の真珠湾攻撃が採用され、「巨大な国家的ギャンブル」が開始された。

アメリカの禁輸措置により、資源なき日本は確かに窮乏していた。国民は真珠湾をはじめとする「連戦連勝」の報を、喝采の拍手と万歳で迎える。メディアの責任も、重大である。

責任の所在が全く不明な政府は、「民意であった」と言うだろう。

時あたかも、幻の「東京オリンピック」が中止となった直後であった。(フ) 同じ愚を繰り返してはならない。

芸能の力

東日本大震災で大きな被害を受けた東北各地では、日常生活がままならない状況の中で、伝統の民俗芸能が次々と復活していきました。民俗芸能はそこに生きる人々にとっては単なる文化財ではなく、生きがいであり喜びであり、その土地の記憶であったのです。地域社会を再生させる原動力とも言えるものでした。

神楽、獅子舞、剣舞といった民俗芸能のもつ力とは何なのか、という問いをベースに伝統芸能、古典芸能、現代の芸能に広く目を配って、「芸能の力」と銘打って選書してみました。

折口信夫によれば、「日本の国家組織に先立って、芸能者には団体があった。その歴史をしらべると日本の奴隷階級の起源、変化、固定のさまがよくわかる。日本には良民と浮良民とがある。そのうかれ人が芸人なのである」（『日本芸能史ノート』）。この折口の言葉に自分たちのルーツを求め、現代の河原者を自称するのが水族館劇場です。神社やお寺の境内に巨大な特設テント小屋を建て、三十年にわたって活動をつづけている芝居集団を手がかりに、芸能の歴史と現代に生きる芸能について見ていきたいと思います。



『水族館劇場のほうへ』

『水族館劇場のほうへ』

（羽鳥書店・桃山邑編・五八〇〇円）

一九八七年に結成された、アングラ劇団の血を引く野外劇集団、水族館劇場。その主宰者桃山邑が「二十一世紀の明宿集」と標榜した「水族館劇場の『いま』と『これから』」をまとめた二冊。旗上げ以来〈座〉の建立にこだわり、自分たちで高さ十三メートルにおよぶ巨大な仮設劇場をつくり、これを野戦攻城の旗と呼んで博覧会的スペクタクルを展開する。劇団の代名詞とも言える二・五トンにも及ぶ本水を使った演出がクライマックス。

また毎年、年末年始には寄せ場といわれる場所——山谷、横浜寿町、渋谷、新宿、上野——で路上芝居ユニットへさすらい姉妹の投げ銭芝居を上演している。東京でのテント公演が場所の問題でむ

ずかしくなり、今年は五月に三重県の津市芸濃町で公演。観客は小学生から高齢者まで幅広く集まり連日満席となった。



『精霊の王』

『精霊の王』

(講談社・中沢新一著・二二〇〇円)

中沢が子どもの頃、父の書齋には石棒や石皿がころがっていた。それらが「シャグジ」と呼ばれる不思議な神さまを表したもので、日本列島にまだ国家もなく神社もなく神々の体系すら存在しなかつた時代の精神の息吹を伝える「古層の神」の活動のいまに残されるわずかな痕跡を示すものだ、柳田國男の『石神問答』によって知る。神というよりは精霊に近いシャグジは、列島に国家が出現し、人々の思考がそれによって大きな変化をとげてしまうと、巨大な規模での没落がはじまり、祀られていた場所に神社が

建ち、精霊の石たちは捨てられたということも。

ところが、社会の表舞台からは姿を消したかのように思われた精霊シャグジは、芸能と技術を専門とする職人たちの世界では、その名も「宿神^{シラシジン}」と呼ばれて、芸能に生命を吹き込み、技術に物質を変成させる魔力を与える守護神として、大切に守り続けられていた。観阿弥・世阿弥や金春禅竹も、この宿神の活動からインスピレーションを受けて能作品を生み出したわけである。中世の人々は、この精霊を「後戸の神」と呼んだ。

中沢は本書で、思考する行為に「後戸」の空間にみなぎる霊力を注ぎ込むことによって、「創造の空間」への通路を開こうとする。日本人の精神史をくつがえす意欲作。現代語訳「明宿集」(金春禅竹が残したテキスト。猿楽でもっとも重要な精神的価値を持つ「翁」の本質を論じた書)も付す。

『宿神論——日本芸能民信仰の研究』

(岩波書店・服部幸雄著・八五〇〇円)

歌舞伎研究者として多くの業績のある著者の遺作。川添裕編集。芸能史、文化

史に残る金字塔。中世の猿楽芸能者たちが信仰したとされる神々のなかでもその根幹に置かれていた秘密の神格、「宿神」
Ⅱ「摩多羅神」を発見する。巻末に付けられた、「後戸の神」「宿神論」関係主要参考文献目録十四ページが圧巻。

『秦河勝』

(吉川弘文館・井上満郎著・二〇〇〇円)

能楽の祖とされる飛鳥時代の渡来系氏族の代表的人物・秦河勝。崇仏論争のとき聖徳太子の側近として登場し、新羅使節の接待役や邪教を広めた大生部多^{おおうべのおお}の打倒など、ヤマト政権の軍事・外交に貢献する。聖徳太子から仏像を下賜されて京都太秦に広隆寺を創建したことも知られる。謎に包まれた生涯と行動を、京都を地盤とする秦氏の氏族の伝統から描く。人物叢書の一冊。



『河原ノ者・非人・秀吉』

『河原ノ者・非人・秀吉』

(山川出版社・服部英雄著・二二八〇〇円)

タイトルにひかれ手にとつたら、本書は徹底した「中世史の観点から差別の歴史を叙述する」書であった。被差別民の新たな活動と役割を中世の視座から明らかにし、非人の世界に身を置きながら閃白にまで昇りつめた秀吉をとらえ直し、あらゆる史料を熟読し、秀頼は秀吉の子ではないことを立証する。フィールド調査と史料の読み直しによって、被差別民の新しい像が浮かび上がる。毎日出版文化賞受賞。



『河原者ノススメ』

『河原者ノススメ——死穢と修羅の記憶』

(幻戯書房・篠田正浩著・三六〇〇円)

戦後日本の代表的な映画監督の一人、篠田正浩が、満を持してものした書。泉鏡花文学賞受賞。

「私が理解する芸能の「運命」とは、古代から人々が信仰した宗教、それが神であれ仏であれ、宗教に伴う禁忌を背負った芸能者が常民と差別されてきたことである。いわゆる河原者、乞食、という賤称を浴びせられてきた芸能者の「運命」のことである。私は芸能者たちの「運命」を追跡して、この国の歴史が時系列に記述されることで生ずる単純化に抗してみたい。」

芸能がつくりあげた荒唐無稽こそ、宇宙の片隅で漂う人間の叡智の産物かもしれない、と説く。

『幻影の「昭和芸能」——舞台と映画の競演』

(森話社・藤井康生著・三六〇〇円)

戦前・戦後に人気があった新派・新国劇・歌舞伎を中心にして、映画化された作品を拾い出し、「昭和の芸能」の人気の秘密を探りながら、その歴史の意味を考える。舞台と映画が競いあつていたころの、日本文化のひとつの在りよう「昭和の芸能」を哀惜をもって振り返る。筆者自身のコレクションから選んだ写真も貴重なものが多くありがたい。新派

篇、新国劇篇、歌舞伎篇、番外篇の四部構成。番外篇には「阿部一族」・「雪之丞変化」^{マクベス}「がめつゝい奴」^{蜘蛛巣城}を収録している。

『浪曲論』

(彩流社・稲田和浩著・二〇〇〇円)

浪曲はかつて日本中を席卷した芸能であり、明治三十年から昭和三十年代までの六、七十年のあいだは、芸能のトップに君臨していた。その後衰退と言われてきたが、どっこい生きている。昭和三十五年生まれの著者が、見たこと聞いたことから導き出した浪曲論。代表作品をとおして世に知られた主題を論じ、その隆盛と衰退の要因を徹底的に分析し、節に宿る言霊を追究する。

とりあげられた名作——義士伝・安中草三郎・紺屋高尾・清水次郎長伝・天保水滸伝・佐渡情話・壺坂靈験記・天保六花撰・杉野兵曹長の妻・乃木將軍伝・野狐三次・唄入り観音経・佐倉義民伝・唐人お吉・父帰る・英国密航・芝浜の革財布・浪花節じいさん。



『旅芸人のフォークロア』

『旅芸人のフォークロア——門付芸「春駒」に日本文化の体系を読みとる』

(農文協・川元祥一著・一七一四円)

群馬県は赤城村の北西。広大で豊かな土地の一面にある農村には、正月になると旅芸人による門付芸の春駒がやって来て、農作物の豊穡や家族の平穏を祈って回った。ところがある年、春駒を舞う旅芸人が来なかった。そしてその年、その農村の養蚕が全滅した。大正時代半ばの頃のことである。旅芸人がもたらす門付芸と農民のあいだには、私たちが気が付いていない深い関係性があるのではないかと考えた著者が、一九九三年の正月に訪ねて行く。春駒を通して見られた日本のアニミズムから著者が学んだものは。



『本邦ストリップ考』

『小沢昭一座談③ 本邦ストリップ考——はじめに』

(晶文社・小沢昭一著・二四〇〇円)

戦後ストリップ史を深井俊彦(演出家)と中谷陽(雑誌編集長)とともに縦横無尽に語った後、伝説化した歴史上の人物、一条さゆりをとりあげる。刑務所面会記などを交えながらワイセツ裁判記録を取めた昭和史の貴重な記録。仄聞するところによると昨今のストリップ劇場は老人たちのたまり場と化し、かつてのようなギラギラした男が集まる場所ではなくなっている由。今となっては大変貴重な芸能史となったが、裁判記録の速記録には、駒田信二や田中小実昌の名前も。



『にっぽん芸能史』

『にっぽん芸能史』

(映人社・稲田和浩著・一五〇〇円)

大衆芸能を主軸にした日本芸能史。古事記に記されたアメノウズメのパフォーマンスを日本芸能の原点とする著者は、宮廷の芸能から庶民芸能―武士の時代の芸能―江戸の歌舞伎と時代を追いながら、芸能の発生・歌舞伎の成立・人形浄瑠璃のはじまり・落語講談浪花節の起りを押さえていく。今に生きる芸能のルーツを辿りながら、「アングラ演劇から小劇場へ」という項目もあり、小冊子ながら内容十分の芸能史。(羽鳥書店 羽鳥)

*愛書家の楽園・特集「芸能の力」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、七月十日～八月九日までフェア展開中です。



ジュンク堂池袋本店では、「憲法」と日本のいま・これから」をテーマに歴代作家書店店長に本を推薦していただく特別企画を開催中です。戦後七十年の基盤をつくった憲法について、今一度考えてみるための書籍をご紹介します。

歴代店長のうち十二人の店長と三人の法学者の先生にご協力いただきました。

谷川俊太郎先生選書

- 『赤毛のハンラハンと葦間の風』
〔平凡社・W.B.アイイツ作・二五〇〇円〕
- 『虹をつかむ男』
〔ハヤカワepi文庫・ジェイムズ・サーバー著・七六〇円〕
- 『李賀歌詩編 1 蘇小小の歌』
〔平凡社東洋文庫・李賀著・三〇〇〇円〕
- 『日本文化における時間と空間』
〔岩波書店・加藤周一著・二二〇〇円〕
- 『読むと書く 井筒俊彦エッセイ集』
〔慶應義塾大学出版会・井筒俊彦著・五八〇〇円〕
- 『野生の介護』
〔雲母書房・三好春樹著・一五〇〇円〕

安野光雅先生選書

- 『日本国憲法』
〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕
- 『あたらしい憲法のはなし』
〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕
- 『民主主義 文部省著作教科書』
〔径書房・文部省編・二〇〇〇円〕
- 『対訳 21世紀に生きる君たちへ』
〔朝日出版社・司馬遼太郎著・八五〇円〕
- 『一年有半』
〔光文社古典新訳文庫・中江兆民著・一〇四〇円〕
- 『新訂 福翁自伝』
〔岩波文庫・福沢諭吉著・一〇二〇円〕
- 『西洋事情』
〔慶應義塾大学出版会・福沢諭吉著・一四〇〇円〕
- 『新訂 蹇蹇録 日清戦争外交秘録』
〔岩波文庫・陸奥宗光著・一〇八〇円〕
- 『改版 茶の本』
〔岩波文庫・岡倉覚三著・四二〇円〕
- 『摘録断腸亭日乗 上・下』
〔岩波文庫・永井荷風著・上巻九〇〇円、下巻八六〇円〕
- 『君たちはどう生きるか』
〔岩波文庫・吉野源三郎著・九〇〇円〕

『方法序説』

〔岩波文庫・テカルト著・五二〇円〕

『人権宣言集』

〔岩波文庫・高木八尺他編・一〇二〇円〕

『日本文化のゆくえ』

〔岩波現代文庫・河合隼雄著・二二四〇円〕

『東洋の理想』

〔講談社学術文庫・岡倉天心著・八〇〇円〕

『坂の上の雲 一〜八 新装版』

〔文春文庫・司馬遼太郎著・各六五〇円〕

椎名誠先生選書

『生きて帰ってきた男 ある日本兵の戦争と戦後』

〔岩波新書・小熊英二著・九四〇円〕

『日本の今を問う 沖繩・歴史・憲法』

〔七つ森書館・雨宮処凛他著・九〇〇円〕

『戦後入門』

〔ちくま新書・加藤典洋著・一四〇〇円〕

『歴史認識』とは何か 対立の構図を超えて』

〔中公新書・大沼保昭著・八四〇円〕

『なぜ戦争は伝わりやすく平和は伝わりにくいのか』

〔光文社新書・伊藤剛著・八〇〇円〕

『新国防論 9条もアメリカも日本を守れ』

『ない』

〔毎日新聞出版・伊勢崎賢治著・一五〇〇円〕

『上野千鶴子の選書論』

〔集英社新書・上野千鶴子著・七四〇円〕

『平和憲法の深層』

〔ちくま新書・古関彰一著・八六〇円〕

『石より堅い9条がある』

〔川辺書林・小林多津衛著・一〇〇〇円〕

『日本国憲法』

〔金曜日・伊藤真・長倉洋海著・一八〇〇円〕

『現代語訳でよむ日本の憲法 憲法の英文版を「今の言葉」に訳してみたら』

〔アルク・柴田元幸訳・一五〇〇円〕

『日本国憲法前文』

〔三五館・南風椎訳・九七一円・店頭在庫限り〕

『五市市憲法草案とその起草者たち』

〔日本経済評論社・色川大吉編著・三〇〇〇円〕

『日本国憲法』

〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕

『あたらしい憲法のはなし』

〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕

『ちいさな労働者 写真家ルイス・ハイン』

の目ごとらえた子どもたち』

〔あすなろ書房・ラッセル・フリードマン著・一三〇〇円〕

『ピュリツァー賞受賞写真全集録 第2版』

〔日経ナショナルリゾログラフィック社・ハル・ビュエル編著・三九〇〇円〕



『戦後入門』

上野千鶴子先生選書

『「難死」の思想』

〔岩波現代文庫・小田実著・一〇〇〇円〕

『ぼくらの民主主義なんだぜ』

〔朝日新書・高橋源一郎著・七八〇円〕

『シニア左翼とは何か』

〔朝日新書・小林哲夫著・七八〇円〕

『憲法九条』国民投票』

〔集英社新書・今井一著・店頭在庫限り〕

『憲法改正』の真実』

〔集英社新書・樋口陽一・小林節著・七八〇円〕

『来るべき民主主義 小平市都道328号線と近代政治哲学の諸問題』

〔幻冬舎新書・國分功一郎著・七八〇円〕

『戦後入門』

〔ちくま新書・加藤典洋著・一四〇〇円〕

『加藤周一戦後を語る』

〔かもがわ出版・加藤周一著・三二〇〇円〕

『言い残しておくこと』

〔作品社・鶴見俊輔著・二四〇〇円〕

『憲法と民主主義の論じ方』

〔朝日新聞出版・長谷部恭男・杉田敦著・一三〇〇円〕

『読む。書く。護る。『憲法前文』のつくり方』

〔角川書店・大塚英志編著・一一〇〇円〕

『SEALDs 民主主義ってこれだ!』

〔大月書店・SEALDs編著・一五〇〇円〕

『民主主義ってなんだ?』

〔河出書房新社・高橋源一郎×SEALDs著・一二〇〇円〕

『イ★ク★3★7 増補版』

〔河出書房新社・辺見庸著・二三〇〇円〕

『集団の自衛権はなぜ違憲なのか』

〔晶文社・木村草太著・一三〇〇円〕

『五日市憲法草案とその起草者たち』

〔日本経済評論社・色川大吉編著・三〇〇〇円〕

『あたらしい憲法のはなし』

〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕

佐藤優先生選書

『神様2011』

〔講談社文庫・川上弘美著・八〇〇円〕

『ポラード病』

〔文藝春秋・吉村萬壺著・一四〇〇円〕

『経済原論』

〔岩波文庫・宇野弘藏著・八〇〇円〕

『この国の冷たさの正体 一億総「自己責任」時代を生き抜く』

〔朝日新書・和田秀樹著・七二〇円〕

『菊と刀 日本文化の型』

〔講談社学術文庫・ルース・ベネディクト著・一二八〇円〕

『腑抜けども、悲しみの愛を見せる』

〔講談社文庫・本谷有希子著・四四八円〕

『あなたの子』

〔文春文庫・角田光代著・四八〇円〕

『笹野頼子三冠小説集』

〔河出文庫・笹野頼子著・六八〇円〕

『日本の大課題 子どもの貧困』

〔ちくま新書・池上彰著・八二〇円〕

『中東複合危機から第三次世界大戦へ』

〔PHP新書・山内昌之著・八二〇円〕

日野原重明先生選書

『憲法九条の戦後史』

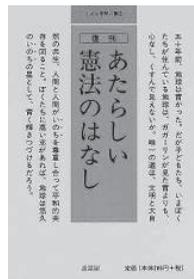
〔岩波新書・田中伸尚著・店頭在庫限り〕

『この国が好き』

〔マガジンハウス・鎌田寛著・九五二円〕

『あたらしい憲法のはなし』

〔童話屋・童話屋編集部編・二八六円〕



『あたらしい憲法のはなし』

福岡伸一先生選書

『33年後のなんとなく、クリスタル』

〔河出書房新社・田中康夫著・一六〇〇円〕

『方舟さくら丸』

〔新潮文庫・安部公房著・五九〇円〕

『マクニール世界史講義』

〔ちくま学芸文庫・ウイリアム・H・マクニール著・九五〇円〕

『無常という力「方丈記」に学ぶ心の在り方』

〔新潮社・玄侑宗久著・一一〇〇円〕

『困難な成熟』

〔夜間飛行・内田樹著・一六〇〇円〕

『6度目の大絶滅』

〔NHK出版・エリザベス・コルバート著・二四〇〇円〕

〔ホワット・イフ? 野球のボールを光速で投げたらどうなるか』

〔早川書房・ランドール・マンロー著・一五〇〇円〕

『僕の場合』

〔大和書房・隈研吾著・一五〇〇円〕

〔生物と無生物のあいだ』

〔講談社現代新書・福岡伸一著・七四〇円〕

〔世界は分けてもわからない』

〔講談社現代新書・福岡伸一著・七八〇円〕

『できそこないの男たち』

〔光文社新書・福岡伸一著・八二〇円〕

『動的平衡 1・2』

〔木楽舎・福岡伸一著・各一五二四円〕

『動的平衡ダイアログ』

〔木楽舎・福岡伸一著・一五〇〇円〕

『芸術と科学のあいだ』

〔木楽舎・福岡伸一著・一五〇〇円〕

『フェルメール光の王国』

〔木楽舎・福岡伸一著・二二〇〇円〕

佐高信先生選書

『魯迅 新版』

〔未來社・竹内好著・二〇〇〇円〕

『自動車の社会的費用』

〔岩波新書・宇沢弘文著・七〇〇円〕

『市場と権力「改革」に憑かれた経済学者の肖像』

〔講談社・佐々木実著・一九〇〇円〕

『水俣病』

〔岩波新書・原田正純著・八〇〇円〕

『モンサント 世界の農業を支配する遺伝子組み換え企業』

〔作品社・マリール・モニク・ロバン著・三四〇〇円〕

『原発のウソ』

〔扶桑社新書・小出裕章著・七四〇円〕

『沖縄密約「情報犯罪」と日米同盟』

〔岩波新書・西山太吉著・七二〇円〕

『密約 外務省機密漏洩事件』

〔岩波現代文庫・澤地久枝著・一一〇〇円〕

『朝鮮と日本に生きる』

〔岩波新書・金時鐘著・八六〇円〕

『差別と日本人』

〔角川 one テーマ21・野中広務・辛淑玉著・七二四円〕

『現代日本の革新思想 上・下』

丸山眞男対話篇2・3』

〔岩波現代文庫・梅本克己・佐藤昇・丸山眞男著・各八〇〇円〕

『丸山眞男と田中角栄』

〔集英社新書・佐高信・早野透著・七四〇円〕

『田中角栄 戦後日本の悲しき自画像』

〔中公新書・早野透著・九四〇円〕

『この国はどこで間違えたのか』

〔光文社知恵の森文庫・佐高信・寺島実郎著・七四三円〕

『安倍政権を笑い倒す』

〔角川新書・佐高信・松元ヒロ著・八〇〇円〕

『安倍「壊憲」を撃つ』

〔平凡社新書・小林節・佐高信著・七四〇円〕

『大逆事件 死と生の群像』

〔岩波書店・田中伸尚著・二七〇〇円〕

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

〔朝日出版社・加藤陽子著・一七〇〇円〕

『憲法と知識人 憲法問題研究会の軌跡』

〔岩波現代全書・邱静著・二三三〇円〕

『この人たちの日本国憲法』

〔光文社・佐高信著・一六〇〇円〕

小熊英二先生選書

『雇用不安』

〔岩波新書・野村正実著・店頭在庫限り〕



『敗北を抱きしめて
第二次大戦後の日本人』

『日中関係戦後から新時代へ』

(岩波新書・毛里和子著・八〇〇円)

『新しい労働社会 雇用システムの再構築へ』

(岩波新書・濱口桂一郎著・七四〇円)

『現代日本の政党デモクラシー』

(岩波新書・中北浩爾著・八〇〇円)

『日本財政転換の指針』

(岩波新書・井手英策著・八〇〇円)

『教育委員会 何が問題か』

(岩波新書・新藤宗幸著・七六〇円)

『国土計画を考える 開発路線のゆくえ』

(中公新書・本間義人著・店頭在庫限り)

『敗北を抱きしめて 増補版 上・下』

(岩波書店・ジョン・ダワー著・各

二七〇〇円)

『福祉政治 日本の生活保障とデモクラシー』

(有斐閣・宮本太郎著・一五〇〇円)

柴田元幸先生

『プロット・アゲンスト・アメリカ』

(集英社・フィリップ・ロス著・二二二〇円)

『カッコーの巣の上で』

(白水Uブックス・ケン・キージー著・二〇〇〇円)

『地図になかった世界』

(白水社・エドワード・P・ジョーンズ著・三〇〇〇円)

『戦争と子ども』

(西田書店・山崎佳代子著・山崎光絵・一八〇〇円)

『ガリヴァー旅行記』

(岩波文庫・スウィフト著・一〇二〇円)

『どん底の人びと ロンドン1902』

(岩波文庫・ジャック・ロンドン著・店頭在庫限り)

『ジョン・レノン対火星人』

(講談社文芸文庫・高橋源一郎著・一一〇〇円)

『スローターハウス5』

(ハヤカワ文庫・カート・ヴォネガット・ジュニア著・七二〇円)

『華氏451度 新訳版』

(ハヤカワ文庫・レイ・ブラッドベリ著・

八六〇円)

『侍女の物語』

(ハヤカワepi文庫・マーガレット・アトウッド著・一二〇〇円)

『一九八四年 新訳版』

(ハヤカワepi文庫・ジョージ・オーウェル著・八六〇円)

『怒りの葡萄 新訳版 上・下』

(ハヤカワepi文庫・ジョン・スタインベック著・各八四〇円、店頭在庫限り)

安彦良和先生選書

『三酔人経綸問答』

(岩波文庫・中江兆民著・七四〇円)

『挫折』の昭和史 上・下』

(岩波現代文庫・山口昌男著・上巻二二〇〇円、下巻一三〇〇円)

『北一輝論』

(講談社学術文庫・松本健一著・一一五〇円)

『千々にくだけて』

(講談社文庫・リービ英雄著・五九〇円)

『敗走記』

(講談社文庫・水木しげる著・五三〇円)

『ゴーマニズム宣言SPECIAL 新戦

争論1』

- 〔幻冬舎・小林よしのり著・一七〇〇円〕
 〔日米開戦の真実 大川周明著〕米英東
 亜侵略史』を読み解く』
 〔小学館文庫・佐藤優著・七一四円〕
 〔慰安婦と戦場の性』
 〔新潮選書・秦郁彦著・一七〇〇円〕
 〔レイテ戦記上・中・下』
 〔中公文庫・大岡昇平著・上巻八三八円、
 中巻八五七円、下巻八七六円〕
 〔検証戦争責任 上・下』
 〔中公文庫・読売新聞戦争責任検証委員
 会編著・上巻五七一円、下巻六二九円〕
 〔一下級将校の見た帝国陸軍』
 〔文春文庫・山本七平著・五六〇円〕
 〔日本のナシヨナリズム』
 〔ちくま新書・松本健一著・六八〇円〕
 〔現人神の創作者たち 上・下』
 〔ちくま文庫・山本七平著・上巻八八〇円、
 下巻九〇〇円〕
 〔最終戦争論』
 〔中公文庫・石原莞爾著・五五二円〕
 〔敗北を抱きしめて増補版上・下』
 〔岩波書店・ジョン・ダワー著・各二七
 〇〇円〕
 〔日本の名著(35) 陸奥宗光』
 〔中公パックス・萩原延寿編・店頭在庫

- 限り)』
 〔愛情はふる星のごとく 新装版上・下』
 〔青木書店・尾崎秀実著・各二〇〇〇円〕
 〔敗者の古代史』
 〔中経出版・森浩一著・一八〇〇円〕
 〔宮崎滔天三十三年の夢』
 〔日本図書センター・宮崎滔天著・一八
 〇〇円〕
 〔シナ人とは何か 内田良平の『支那観』
 を読む』
 〔展転社・宮崎正弘・内田良平研究会編著・
 一九〇〇円〕

加藤陽子先生選書

- 〔農民作家 上泉秀信の生涯』
 〔歴史春秋出版・中山雅弘著・一五〇〇円〕
 〔誰も国境を知らない』
 〔朝日文庫・西牟田靖著・八二〇円〕
 〔故郷はなぜ兵士を殺したか』
 〔角川選書・一ノ瀬俊也著・一八〇〇円〕
 〔ヒトラーとナチ・ドイツ』
 〔講談社現代新書・石田勇治著・九二〇円〕
 〔大日本帝国』崩壊 東アジアの
 1945年』
 〔中公新書・加藤聖文著・八二〇円〕
 〔クーデターの技術』

- 〔中公選書・クルツイオ・マラバルテ著・
 二四〇〇円〕
 〔中国の強国構想』
 〔筑摩選書・劉傑著・一六〇〇円〕
 〔増補 中世日本の内と外』
 〔ちくま学芸文庫・村井章介著・一二
 〇〇円〕
 〔中国の歴史』
 〔ちくま学芸文庫・岸本美緒著・一二
 〇〇円〕
 〔靖国参拝の何が問題か』
 〔平凡社新書・内田雅敏著・七四〇円〕
 〔隣人が敵国人になる日 第一次世界大
 戦と東中欧の諸民族』
 〔人文書院・野村真理著・一六〇〇円〕
 〔新しく学ぶ西洋の歴史 アジアから考
 える』
 〔ミネルヴァ書房・南塚信吾他編・
 三二〇〇円〕
 〔戦時期日本の翼賛政治』
 〔吉川弘文館・官田光史著・九〇〇〇円〕
 〔池田政権期の日本外交と冷戦』
 〔岩波書店・吉次公介著・四二〇〇円〕
 〔吉野作造政治史講義』
 〔岩波書店・吉野作造講義録研究会編・
 七五〇〇円〕

『人は時代といかに向き合うか』

(東京大学出版会・三谷太一郎著・二九〇〇円)

『本当の戦争の話をしよう 世界の「対立」を仕切る』

(朝日出版社・伊勢崎賢治著・一七〇〇円)
『日本再軍備への道 1945・1954年』

(ミネルヴァ書房・柴山太著・九〇〇〇円)

『清沢冽の自由主義思想』

(日本経済評論社・佐久間俊明著・五二〇〇円)

『金森徳次郎の憲法思想の史的研究』

(同成社・霜村光寿著・六〇〇〇円)

長谷部恭男先生選書

『アメリカのデモクラシー 第1巻上・下』

(ワイド版岩波文庫・トクヴィル著・上巻一四〇〇円、下巻一七〇〇円)

『アメリカのデモクラシー 第2巻上・下』
(同・上巻一二〇〇円、下巻一三〇〇円)

『社会契約論』

(岩波文庫・ルソー著・七二〇円)

『法の原理』

(岩波文庫・ホップズ著・一〇一〇円)

『完訳 統治二論』

(岩波文庫・ジョン・ロック著・一四四〇円)

『ザ・フェデラリスト』

(岩波文庫・A.ハミルトン著・九六〇円)
『現代議会主義の精神的状況他一篇』

(岩波文庫・カール・シュミット著・六〇〇円)

『ユダヤ人問題によせてヘーゲル法哲学批判序説』

(岩波文庫・カール・マルクス著・六二〇円)

『民主主義の本質と価値他一篇』

(岩波文庫・ハンス・ケルゼン著・六六〇円)

『輝く日の宮』

(講談社文庫・丸谷才一著・七三三円)

『プロレゴメナ・人倫の形而上学の基礎づけ』
(中公クラシックス・カント著・一八〇〇円)

『日の名残り』
(ハヤカウェイ文庫・カズオ・イシグロ著・七六〇円)

『法の概念』

(ちくま学芸文庫・H.L.A.ハート著・一五〇〇円)

『美徳なき時代』

(みすず書房・A.マッキンタイア著・五五〇〇円)

『正しい戦争と不正な戦争』

(風行社・マイケル・ウォルツァー著・四〇〇〇円)

『リアリズムの法解釈理論』

(勁草書房・ミシェル・トロペール著・四二〇〇円)

『僭主政治について上・下』

(現代思潮新社・レオ・シュトラウス著・上巻三八〇〇円、下巻四二〇〇円)

『自由論 新装版』

(みすず書房・I.パーリン著・五六〇〇円)

『戦争と平和の権利 政治思想と国際秩序』
(グロティウスからカントまで)
(風行社・リチャード・タック著・六〇〇〇円)

木村草太先生選書

『世界憲法集 新版第2版』

(岩波文庫・高橋和之著・一三八〇円)
『民主主義の本質と価値他一篇』

(岩波文庫・ハンス・ケルゼン著・六六〇円)

『いま平和とは 人権と人道をめぐる9話』

『岩波新書・最上敏樹著・七八〇円』

『比較不能な価値の迷路 リベラル・デモクラシーの憲法理論』

（東京大学出版会・長谷部恭男著・三八〇〇円）

『論点探究 憲法第2版』

（弘文堂・小山剛・駒村圭吾編・三六〇〇円）

『新解説世界憲法集 第3版』

（三省堂・初宿正典・辻村みよ子編・二五〇〇円）

『フランス憲法入門』

（三省堂・辻村みよ子・糠塚康江著・三八〇〇円）

『自由と特権の距離 カール・シュミット』

『制度体保障』論・再考 増補版』

（日本評論社・石川健治著・四七〇〇円）

『日本国憲法全訂 第2版』

（日本評論社・宮沢俊義著・五七〇〇円）

『憲法論』

（みすず書房・カール・シュミット著・六五〇〇円）

『比較憲法』

（ミネルヴァ書房・君塚正臣編著・三五〇〇円）

『アメリカ憲法入門 第7版』

（有斐閣・松井茂記著・二八〇〇円）

『現代立憲主義の制度構想』

（有斐閣・高橋和之著・四三〇〇円）

『立憲主義と日本国憲法 第3版』

（有斐閣・高橋和之著・三〇〇〇円）

『1945年のクリスマス 日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝』

（柏書房・ベアテ・シロタ・ゴードン著・一七四八円）

『ブリッジブック憲法』

（信山社出版・横田耕一他編・二〇〇〇円）

『ドイツ憲法集 第7版』

（信山社出版・高田敏・初宿正典編訳・三三〇〇円）

『思想としての日本憲法史』

（信山社出版・長尾龍一著・二八〇〇円）

『憲法 第6版』

（新世社・長谷部恭男著・三三五〇円）

『憲法の Imagination』

（羽鳥書店・長谷部恭男著・二六〇〇円）

長尾龍一先生

『拝啓マッカーサー元帥様』

（岩波現代文庫・袖井林二郎著・店頭在庫限り）

『敗北を抱きしめて 増補版上・下』

（岩波書店・ジョン・ダワー著・各二七〇〇円）

『昭和史 上1926・45 下1945・89』

（東洋経済新報社・中村隆英著・各九三三円）

『昭和史 戦争と平和の日本』

（みすず書房・ジョン・ダワー著・三八〇〇円）

『昭和』という国家』

（NHKブックス・司馬遼太郎著・一一六〇円）

『日本国憲法の誕生』

（岩波現代文庫・古関彰一著・一四〇〇円）

『吉田茂II マッカーサー 往復書簡集 1945・1951』

（講談社学術文庫・袖井林二郎編訳・一五五〇円）

*このフェアは、ジュンク堂書店大宮高島屋店・藤沢店・三宮店・広島駅前店・立川高島屋店・名古屋店・MARUZ EN名古屋本店でも開催します。詳細は各店舗へお問い合わせ下さい。

今月の
おすすめ

社会科学



福島第一原発廃炉図鑑

開沼 博編 震災から五年もたつと、新聞やテレビで福島第一原発（一F）がとりあげられる機会はめっきり少なくなつた。だがそれは、廃炉作業が少しずつではあるが、着実に進んでいるということなのだ、本書を読んで感じた。

一Fの敷地内の様子や、従業員の日々の日常、まだ住民の避難が続く周辺地域の情報など、フクシマのいまが多角的にわかる内容になっている。イラストや写真も多く、図鑑と銘うっているように、読みたいところから読んでいけるありが

たいつもりで、常に手元に置いておきたい一冊だ。

太田出版

二二〇〇円

「リベラル」がうさんくさい のには理由がある

橋 玲著

本書は「週刊ブレイボイイ」に掲載されていたコラムやインターネット上に掲載されたコラムなどを加筆・修正・再構成したものの。

著者は金融や経済についてのイメージが強い作家であるが、本書では政治評論が中心になっている。過激な小見出しを並べ、様々なテーマを切り口に保守派とリベラルの論戦について著者独自の知見から見解を述べていくスタイルであり、宗教や国際政治にも広がりを見せている。

集英社

一四〇〇円

HAB No.2 本と流通

書店に並ぶ書籍は、出版社からのようなルートを経て到着するのか。本書は一般的にあまり知られない、書籍流通を関係者のインタビュー形式で記した一冊である。

戦後日本において初期は分かれていた雑誌流通と書籍流通が混ざり、二大取次の日販とトーハンが登場し、その後小売店による値引き競争防止のために定価販売が始まるなど、現在の流通に至るまでの流れが語られる。書籍を多くの人に届けるために奮闘した時代の軌跡は、まさに出版不況の今改めて読むべき物語だと感じる。

エイチアンドエスカンパニー

二二〇〇円

道徳感情はなぜ人を 誤らせるのか

管賀江留郎著

著者はウェブサイトの「少年犯罪データベース」の主宰者。本職は不明で、日々古い文献を読み続けているという。前作の『戦前の少年犯罪』（築地書館・二二〇〇円）から約九年ぶりの著作である。

本書は戦前最大の難事件と言われ、昭和十六年に起きた浜松事件を説明しようというのが本筋である。そのために戦時中の浜松の状況、他の事件にも言及し、浜松事件にあたった警察関係者を軸に筆を進める。加えて、警察や司法の制度を

触れつつ、さらには冤罪がつくられる原因究明へと続く大著。

洋泉社

二五〇〇円

非正規労働」を考える

小池和男著 著者は労働経済学が専門の著名な学者。数十年にわたる研究の蓄積の中から、非正規労働について論じる。

戦後日本の造船業や機械工場では、臨時工などの呼称で、非正規工員がたくさんいた。また欧米でもやはり様々な業種で非正規という雇用形態は存在する。歴史的な流れや海外との比較もまじえながら、昨今の雇用崩壊を不安視する世間の風潮に鋭く切り込んでいく。特に貴重だと思われるのは、小売りや外食の現場を細かく調査した資料。いまの労働現場の実態（役割や昇格、採用や賃金）がよく把握できている。

名古屋大学出版会

三二〇〇円

さらばカリスマ

日本経済新聞社編

今年四月、セブン&アイの会長兼CEO、鈴木敏文氏が突然退任を表明した。経済界に大きな衝撃が走ったが、本書は

その舞台裏を詳細に取材し、まとめた内容となっている。セブンイレブンなど、グループがここまで発展できたのも、経営陣のチームワークによるところが大きかった。しかし物言う株主、米国の投資ファンドの登場により、いつしかその一枚岩が亀裂が生じたのだ。新生セブン&アイの新たなトップ、井阪隆一氏のロングインタビューも巻末に収録。

日本経済新聞出版社

一五〇〇円



サーチ・インサイド・ユアセルフ
チャデイー・メン・タン著

本書は、グーグルのお客様お出迎え係を務めた著者が開発した、マインドフルネスをベースにした研修プログラム（S I Y）について述べられている。基本は呼吸に集中して瞑想することで、それを

覚えたら座ったり歩いたり動作を加える。あるいは食事する、身体の中を意識することなど様々な応用もできる。これらを実践することにより、自己統制を身につけ、ネガティブな感情をコントロールでき、自信へと繋がると著者は語る。

英治出版

一九〇〇円

資生堂インパクト

子育てを聖域にしない経営

石塚由紀夫著

手厚い子育て支援で知られた資生堂が育児社員に遅番や休日勤務を課し、世間にも大きな衝撃をもって受け止められた「資生堂ショック」。女性に冷たい、業績悪化の影響などと言われることもあったその実態を丹念に取材。

子育て女性に配慮し負荷をかけない状態の功罪、その問題点を克服するための取組みや課題、そして結果。資生堂の改革は会社にも個人にも良い効果をもたらしたが、それを可能にした会社側の綿密な計画と丁寧な対応はさすがである。

人口の半分を占める女性の活用は、どの企業にとっても今後課題となる。先陣を切った資生堂の取組みは示唆に富む。

日本経済新聞出版社

一五〇〇円

**今月の
おすすめ**

コンピューター

SOFT SKILLS

ソフトウェア開発者人生マニュアル
ジョン・ソンメズ著

まっもとゆきひろ解説 長尾高弘訳
プログラマーのための、異色のライフ
デザイン本。目次には「ハッシュテーパー
ル型腹筋のつけ方」「恋愛と人間関係…コ
ンピューターはあなたの手を握れない」
といった、特徴的な見出しが並ぶ。キャ
リアの築き方はもちろん充実したプライ
ベートを送る方法までもが書かれた、あ
なたをまるごとハックするための一冊。

日経B P社 二八〇〇円



ルビイのぼうけん

リンダ・リウカス著 鳥井 雪訳

フィンランド出身の女性プログラマー
による絵本。主人公のルビイはちいさな
女の子。町に隠された宝石をさがす道中
でペンギンや白ヒヨウと出会い、彼らの
困りごとを一緒に解決していく。一見す
るとふつうの絵本だが、大きな問題を小
さな問題に切り分けて考えること、場合
分けをすることといったプログラミング
の基本となる考え方が詰まっている。

翔泳社 一八〇〇円

**あなたの知らないところでソフ
トウェアは何をしているのか？**

V. Anton Spirau 著 原 隆文訳

「十分に発達した科学技術は、魔法と見
分けがつかない」とはSF作家アーサー・
C・クラークの言葉だが、現代を生きる
我々の周りにはそんな魔法が溢れ返って
いる。インターネットを支える暗号化や
パスワード、ゲームや映画の現実と見ま
ごうばかりのグラフィック。それぞれの
魔法の裏側でどんな処理がおこなわれ
ているのが、詳しく紹介されている。

オライリー・ジャパン 二六〇〇円

人工知能とは

松尾 豊編著 中島秀之・西田豊明他著

「人工知能とは何か？」という根源的
な問いに対する、十三通りの答え。人工
知能学会誌に連載された記事をまとめた
もので、回答者はいづれも日本を代表す
る研究者。研究領域の違いから、回答も
そこに至るアプローチもまったく違うの
が興味深い。表紙は鉄腕アトム。人間と
同等の感情を持つロボットが誕生する日
は、本当に訪れるのか。

近代科学社 二四〇〇円

Pythonからはじめる数学入門

Amit Saha 著 黒川利明訳

たとえば紙とペンでフラクタルな図形
を描こうとしたら膨大な手間がかかる
が、プログラムならパターンの繰り返し
処理はお手のもの。このように高校で学
ぶ程度の数学の問題をPythonをつかっ
て解いていくのが本書。ただしPython
に関してはある程度理解していることが
前提なので、ビギナーは『入門 Python 3』
(同・三七〇〇円)などの入門書から先
にチャレンジしてほしい。

オライリー・ジャパン 二八〇〇円

今月の
おすすめ

自然科学

金持ちは、なぜ高いところに住むのか
近代都市はエレベーターが作った

アンドレアス・ベルナルト著

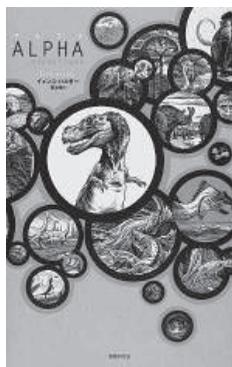
小説、映画、思想、心理学、社会学、果てはテレビコマーシャルの表象まで、「エレベーター」の誕生によるそれらの変遷を考察する本書は、まさに「エレベーター」のアルケオロジである。十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのドイツとアメリカにおいて、如何にエレベーターが浸透し、建築構造に影響を与えてきたのかという歴史観もさることながら、本書が横断するジャンルは多岐にわたっている。本書は、一つの「表象文化論」であり、また「空間論」でもあるのだ。

エレベーターが浸透する以前において、下層階へ行くほどホテルの宿泊費が高かったのは、その技術が信頼されておらず、上層階には常に危険がともなっていたからだという。技術の進歩によって、上層階へのアクセスはボタン一つで可能

となった。下層階と上層階のイメージは逆転し、屋根裏部屋が屋上テラスに変わった。その瞬間、様々な「表象」もまた変化していったのである。

柏書房

二八〇〇円



アルファ

J. Enns・ハルダー著

ビッグバンから人類誕生までの一四〇億年を二〇〇〇枚に及ぶ画で描いた絵巻物。情報過多の時代において、この本のシンプルさは際立つ。時々画の下部に一行の説明文があるものの、多くは画のみで表現されている。ひたすら絵を追ってページをめくると、不思議とスッと頭に入ってくる。どこか昭和のマンガを思い出させるタッチも目を引く。

説明文にルビはないが、子どもから大

人まで楽しめる。親子で読むのもいいだろう。説明が少ないため、会話や調べる事が自然と増えるのではないだろうか。著者は宇宙・地球・生命の歴史を描く三部作を製作中であり、本書はその第一部。続きを読む日が待ち遠しい。

国書刊行会

三七〇〇円

悪魔が教える願いが叶う毒と薬

薬理凶室著 表紙とタイトルの禍々し

さとは対照的に内容は至極まっとうなもので、痛み止めから食品に使われる防腐剤まで、流通している「薬」にまつわる興味深い情報が軽妙な文体で語られている。防虫殺虫に効果的な忌避剤の正しい使い方や風呂場のカビを駆除するための裏技など、季節柄役立つ事例も多いので読み物としても面白い。中国製の海賊版バイアグラがいかにか危険な物かと警鐘を鳴らす一方、体臭を抑える化粧水や強力下剤のレシピなどもあり、硬軟自在な執筆姿勢は相変わらず。しかし覚醒剤が「法律で禁止されているからダメ」のではなく「なぜ法が縛るほどダメなのか」を説く筆致は科学者のそれであり、好感が持てる。

三才ブックス

一三〇〇円

今月の
おすすめ

医 学 書

イザというときにあわてない！

介護職のための

医学知識とケアのポイント

関 弘子著

介護を必要としている人は、様々な病気を抱えている。介護職は利用者の生活を支えるため最低限の医学知識を身につけ、安全なケア・医療職との連携を行い、質の高い安心できる介護が求められる。本書は、介護現場でよく出くわす高齢者の病気の原因・特徴、緊急時の対応、感染症対策などをイラストでわかりやすく解説する。臨床と教育現場で長年高齢者ケアに携わってきた著者が現場で困らない、あわてないノウハウを伝授する。

日本実業出版社 一七〇〇円

T H E 整形内科

白石吉彦・白石裕子・

皆川洋至・小林 只編集

月刊誌「治療」二〇一五年五月号の特

集「T H E 整形内科」が瞬く間に完売したため、本書はこの特集に雑誌では掲載出来なかった項目を追加し書籍化したもの。肩こり症や腰痛などの様々な運動器疾患をとりあげ、診断と治療を紹介している。また整形内科にとって必要な知識と技能、薬物療法や一步踏み込んだ慢性疼痛に向き合うための心理療法なども解説している。「痛み」自体や、患者の背景にある心理的な問題を理解することで「患者の痛み」に寄り添うことが出来るのではないだろうか。

南山堂 四二〇〇円

南山堂

ここが知りたい 強心薬のさじ加減

北風政史編著

慢性心不全を悪化させてしまうこともある強心薬だが、それがなければ救えない生命もある。医師の「さじ加減」で使われてきた強心薬の情報をなるべく正確に診療の現場に届けるにはどうすればいいか、という試みから本書が出来上がった。臨床経験豊富な五十四名の循環器医師による強心薬の使い方の科学に基づいた治療に関するS O P（標準作業手順書）。

中外医学社 六八〇〇円

仙人と妄想デートする

村上靖彦著

重度の精神病、ALS、人工中絶、出産、看取り……生と死の狭間に揺らめく存在の極限に向き合う看護実践は、本質的に無数の多様さへと開かれている。

技術的、法的、倫理的といったさまざまな外から課せられる規範に則りながら、自由な実践の土台となるプラットフォームを自発的に生み出す看護師たち。数名の看護師へのインタビューを分析し、語り手固有の表現を通してそのつど出現する経験的で特異な事象の動きを現象学的に捉える。そこに現れてくるのは行為の哲学、そして（苦しみの中の）かすかな創造性。それは自由と楽しさの別名でもある。

人文書院

一三〇〇円



今月の
おすすめ

人文科学

料理と帝国

レイチエル・ローダン著 ラッセル秀子訳
なにしろ圧倒される。われわれ人類の
飽くなき食への執念といたら／＼拾っ
てくる、集めてくるだけではなくそれを
育てて火であぶり、すり潰して味付けし、
食べるための道具を用意し、遠くまで運
んで日保ちもするように……と、よくぞ
ここまで考えるものだ。それをここまで
調べてまとめあげた著者にも敬服であ
る。枕のお供にしてもいいが、おなが
がすいて眠れなくなるかも。

みずす書房

六八〇〇円



ミニマル子育て

キム・ジョン・ペイン 著

極度の落ち着きの無さ、神経過敏、感
情の爆発など、ストレス障害の様相を表
す子どもたち。多くの原因は、あり余る
物、情報の洪水、過密スケジュールといっ
た現代社会の在り方が、子どもの世界を
脅かすことにある。子ども本来の自由を
取り戻す、シンプルでミニマルな生活を
提唱し多くの子どもとその家庭を回復さ
せた著者による、例証に基づく現代の子
育て指南書。

風濤社

一八〇〇円

治療者のための精神分析ノート

神田橋條治著

著者の精神分析治療の拠り所は「自由
連想法」だという。そのため本書もまた、
「前意識」「コトバ」といったキーワード
をめぐる考察が自由に連なっており、ま
さしく「精神分析ノート」となっている。
傘寿を迎える著者の経験から引き出され
た言葉たちであるから、治療者にとって
のヒントとなる言葉が必ず見つかるに違
いない。

創元社

二五〇〇円

教養としてよむ世界の教典

中村圭志著

宗教に注目が集まっている。本書は宗
教入門書としては珍しく、教典に焦点を
当てている。般若心経や聖書から、ウパ
ニシャッドや西洋神話まで、対象は幅広
い。伝承のされ方や形態など千差万別だ
が、一方で共通性もみられるという。
ニュートラルな目線で宗教を知るための
名著を多数書いてきた著者による、新し
い形の宗教入門書。

三省堂

二四〇〇円

感じるスコラ哲学

山内志朗著

キリスト教の神学校である「スコラ」
での学問が体系化されたものが西洋中世
のスコラ哲学。「スコラ」での学びは一
生大蔵経に囲まれ読み続けるような重苦
しいものだっただろうと著者はいう。な
ぜそのような学問を当時の人々は、また
著者は続けるのか。そんな中世哲学に、
当時の食文化や市民生活を「感じる」こ
とで近づいてみよう。

慶応義塾大学出版会

二〇〇〇円

今月の おすすめ

文学・文芸

小説王

早見和真著

近年の小説不況（出版も不況だが）はどれだけ世間に認知されているのだろうか。又吉直樹『火花』や「本屋大賞作品」のようなメガヒット作が喧伝され、小説業界って華やかで儲かっていいなあ、なんてイメージを持っている方が多いはずだ。

小説というジャンルは本来何千部単位の刷り部数から始まり、売上が良ければ万の万台、運が良ければ数十万の万台に乗る商品が年間十数前後出てくる、というのが理想だった。（ミリオンセラーはまぐれのようなもので計算に入れない。）ところがそれは遠い昔の話。今では初版三千〜四千部、増刷一切なし、万の万台なんてごく一部、という悲劇的な状況になっている。

この現状を何とかしたい！と売れない作家と平凡な編集者が出版界に殴りこ

みをかけ、紆余曲折を経ながらも自分たちの夢を叶える、という本書。

読みながらこんな心が熱くなったのは、本当に久しぶりだ。私は小説という化石になりつつある存在を決して諦めたことはない、と数年ぶりに誓った。

小学館

一六〇〇円

超企画会議

川村元気著

数々の大ヒット映画を制作し、最近の小説家としても活躍中の川村元気氏が、自身の作品も含む日本の映画やドラマをハリウッドに持ち込み、巨匠たちと企画会議をするという「完全妄想」ストーリー。「モテキ」を観て Pettime にハマるウデイ・アレンなど、実在の監督や俳優たちがユーモラスに（妄想で）描かれていて、読後に妙に親近感が湧いてくる。

しかし妄想とはいえ侮るなかれ、そこは映画製作のプロフェッショナル。

キャストイングやアレンジの打ち合わせ内容が妙に生々しく、映画好きなら映画製作の裏を覗き見しているような感覚に……（全部妄想だけ）。

読み終わったあとと無性に映画が観たく

なる、映画好きには特におすすめの一冊。巻末にはハリウッドで活躍する日本人俳優、本物のマシ・オカとの、妄想ではなく本当の企画会議も収録されている。

KADOKAWA

一三〇〇円

ジャツジメント

小林由香著

「復讐法」、犯罪者から受けた被害内容と同じことを合法的に刑罰として自らの手で執行できる法律。五つの章が進むごとに事例が変わり、この法律の重視する部分、執行者・受刑者の事情が複雑になっていき、応報監察官たちも少しずつ変わっていく。ラストは、十歳の少年がネグレクトで妹を殺した母親と義父を復讐法で裁く、表題作の「ジャツジメント」。冒頭の「大切な人が殺されたとき、あなたは『復讐法』を選びますか?」という問いに、読了後すぐに答えられる人ほどのくらいいるだろう。

様々な愛のカタチもあり、読み進めるのが辛い。でも、読み進める手も気持ちも思考も休む暇がなくなっていくのめり込んでしまう作品だ。

双葉社

一四〇〇円

今月の
おすすめ

文庫・新書

道然寺さんの双子探偵

岡崎琢磨著

福岡にあるお寺・道然寺。その道然寺の住職の息子である窪山一海は、元來のお人好しでおせっかいな性格のせいで、よく不思議な事件や出来事に巻き込まれる。謎を解き明かすのは、道然寺に住む双子・レンとラン。しかし、人の悪意を疑う少年・レンと、人の善意を信じる少女・ランの目には、それぞれ違う真相が見えていて……。性格の全く異なる探偵役の二人により、結果的にそれぞれの視点を補いあうような形で真相が明かされていく。そうして明かされる真相は、時に人の悪意にまみれており、時に悪意と善意がからみ合っている。

お寺と家族をテーマにしたミステリー連作集。舞台となるのは福岡県にある架空の街・夕筑市にあるこれまた架空のお寺・道然寺。福岡県太宰府市出身で、お寺の息子である著者自身の経験が存分に

活かされており、違和感なく読める。

朝日文庫

六二〇円

甘いもんでもおひとつ

藍千堂菓子箱

田牧大和著

江戸の町で菓子司「藍千堂」を営む兄弟、晴太郎と幸次郎。二人は実家の菓子司「百瀬屋」から、父亡きあと、店を継いだ叔父によって追われた身である。心優しく、おっとりとした職人肌の晴太郎と、クールで切れ者、商い上手な幸次郎。二人を中心に、藍千堂の職人の茂市、従妹のお糸、同心の岡など、個性豊かな登場人物と、季節感たっぷりの和菓子が織りなす人情あふれる連作短編集。今すぐ和菓子屋に走って行きたくなってしまふような、五感に訴える菓子の描写がすばらしい。

最終話で、なぜ叔父が兄弟を店から追い出し、その後も嫌がらせを続けるのか、という物語の底に流れる謎が解き明かされる。しかしこれで終わりではないのである。兄弟と叔父、そして従妹は今後どうなっていくのか。続きは続編「晴れの日には」（文藝春秋・一五〇〇円）で！

文春文庫

六九〇円

怖いクラシック

中川右介著

夏になると、いや最近では季節に関係なく、ホラー映画や怪談の本がリリースされる。「怖い」と言いながら、それを見たり読んだりすることに抗えないのが人間というものなのだろうか。

だとしたら、クラシック音楽だって、「怖い」からのアプローチは有効なのだ。クラシック音楽への「小難しい」「長い」「退屈」というハードルを下げるために、「癒される」「美しい」など、明るいイメージを強調するのが一般的な手法である。しかし、著者は「恐怖」こそがクラシック音楽の美を作ってきた、と言う。

この本では、人間が怖い、と感じるものの「父親」「自然」「死」「神」「孤独」「戦争」などをキーワードに、音楽史をたどっていく。

偉大な音楽家たちが、いかに「怖い」を音楽で表現しようとしてきたか。クラシック音楽の聴き方が変わる一冊。

NHK出版新書

八二〇円

今月の
おすすめ

芸術

SURI COLLECTION

ヨシダナギ著

アフリカという土地に強く惹かれた少女がいた。大人になれば肌の色を自由に選ぶことができ、いずれアフリカ人のように自分の容姿も変化する日が来ると信じて疑わなかった。それが、本書の著者ヨシダナギである。その願いが叶う日は来なかったが、彼女のアフリカへ強く惹かれる気持ちが変わることはなかった。大人になった彼女はカメラを手に海を越えアフリカへと渡った。彼女のレンズを通してみるアフリカは愛に溢れキラキラと光り輝いている。本書は「世界一ファッショナブルな民族」と呼ばれるスリ族を被写体としている。花や樹、葉っぱや土など、自然にあるものを身に纏い美しく装うスリ族の人々。レンズを見る眼差しはまっすぐで美しい。

いろは出版

三四〇〇円



タイポさんぽ 台湾をゆく

藤本健太郎編著

街を歩けばいたる所に看板やポスターがあり、実に様々な字体やロゴが溢れている。デザインされたそれらに心を奪われたことのある方も多いのではないだろうか。

二〇一二年に発売された『タイポさんぽ』と、その増補新装版にあたる『タイポさんぽ改』に続き三冊目となる本書は、日本を離れて台湾での路上文字観察の記録となっている。

漢字（主に繁体字）のみで構成される台湾のロゴタイプは、日本のものとはまた違った味わいがあり、海外旅行に行つた際、その国独特のロゴタイプや色彩を目にしたことで「ここは日本ではない」

と実感したことを思い出した。

本書に収録されている台湾の街文字は、デザイン性の高いものだったり、はたまたシンプルながらゴシック文字だったり色々だ。文字を見ただけでは一体何のお店なのかわからないものもあるが、本書ではその看板が何のお店なのか解説もしてくれているので、このお店だからこんなイメージを文字で表現しているのか、と想像することも出来る。

今すぐ外へ出て、街にあふれるロゴタイプに思いを馳せてみたくなる一冊である。

誠文堂新光社

一二〇〇円

〈現代演劇〉のレックスン

拡がる場、超える表現

鈴木理映子＋フィルムアート社編

何百年も昔から存在している「演劇」という概念。

本書には所謂「現代演劇」に関しての今までとこれから、さらには知っていないようで知らなかった演劇用語も解説されており、「演劇」とは何かを知ることができる良い入門書となっている。

フィルムアート社

一七〇〇円

今月の
おすすめ

実用書
地図・旅行書

縁切り力

悪縁を断ち、良縁を結ぶ

安井金比羅宮 / 監修

一面真っ黒な表紙に、金色で「縁切り力」の文字。まずこの本を手取る勇気がない方も多いはず。それは冒頭で語られているように「人との縁を大切にすべき」と学んできた私たちにとって、縁を切るという行為は後ろめたさと罪悪感を感じることからだろう。本書はそんな第一印象をよい意味で裏切る内容になっている。

具体的に言うと、真面目で思いやり深い日本人へ向けて「人生の障害となりうる悪縁は切つて大丈夫なんだよ」と応援してくれる、背中を押してくれる内容だ。そして、「悪縁を切る」^①その人を断つ^②だけの意味でなく、心の距離の置き方も学ぶことができる。それには私たちが社会で生きていく上でとても役に立つが、学生の頃に授業では教えてくれなかったもの。知っているか知らないかでは心の

負担が大きく違ってくるだろう。

また、「悪運」とはなにも人に対してだけではないことに気付かせてくれる。お酒、煙草、ギャンブル、マイナス思考……自分にとって負な要素との縁切り

力を高める章にも、ぜひ注目していただきたい。読み終えた後の心晴れやかな気分を一人でも多くの方に感じてもらえたいいなと、私はまた表紙をめくる。

日本文芸社

九〇〇円

ノバク・ジヨコビッチ伝

クリス・パウワース著 渡邊玲子訳

男子プロテニス界のトップをひた走り続ける男、ノバク・ジヨコビッチの評伝が、遂に刊行の運びとなった。いざれ自伝を出したのだからと、本人へのインタビューは断られたそうなのだが、その分周囲への取材が行き届き、現代セルビア史入門としても読める、奥行き深い出来となっている。

少年期のコーチ、エレナ・ゲンチッチとの運命的な出会い、激烈な父スルジャンのこと、空爆の日々、ながらくフェデラーとナダルの後塵を拝した後、いかにしてナンバーワンの座に辿り着いたかな

どなど、興味深いエピソードが盛りだくさんだ。本筋からは枝葉な部分ではあるが、ジヨコビッチにケルテン不耐性と、

乳製品とトマトに対する軽度の不耐性があることが分かったシーンの記述、「ピザ屋の息子になんということか！」に思わず笑ってしまった。驚くところが違うような気がするが、まあそれはいいとして。キャリア・グラランドスラム達成の記念としても読んでおきたい一冊。

実業之日本社

一九〇〇円

京都の凸凹を歩く

梅林秀行著

東京と比べると平坦なイメージのある京都だが、偉人たちの建造物や自然の地形の痕跡が今なお高低差として残っている。著者は、その凸凹地形を足がかりに古都に積み重なった物語を紐解いていく。古地図などを使いながら土地の秘密を探っていく過程はかなりマニアックながら、丁寧な考察に引き込まれる。

「プラタモリ」のプロデューサー・山内太郎氏との対談をまずは一読を。土地の記憶に耳を傾ける楽しさをもっと広がり

青幻舎

一六〇〇円

今月の
おすすめ

語学・辞典

心ときめく オキテ破りの

日本語教授法

五味政信・石黒 圭編著

ベテランの日本語教師十人が、自身の築き上げてきた授業スタイルと理念を、悩める日本語教師に伝えるために出版した本書。オキテ破りだからどんなことをしても許されるということではなく、ベテラン教師の理念に基づき、大胆な方法で授業作りのノウハウを教えている。

第一部は日本語教師とはどうあるべきか、これから目指す人や新しく教える人に知って欲しい心構えである。第二部からは表現論、感情論、活動論と実践的な指南を実際の問題や写真を使い、どのように考えて指導していくかを、悪い例も挙げながら読む人が授業をイメージできるようにになっている。

異文化で育った人が多数集まる日本語の授業では、思いもよらないことが多々起きるそうだ。その中でベテラン教師た

ちの「オキテ破り」な教育方法も自身の場合に合わせて取り入れれば、今後の授業がより有意義なものになっていくだろう。くろしお出版 二二〇〇円

見たもの全部を英語で言う

トレーニングブック

長尾和夫・トーマス・マーティン著

TOEICテストや英検などのスピーキング試験で、写真や絵を説明する問題は数多く出ている。しかしこのような問題に対応する書籍は少ない。本書は写真を英語で説明する方法を学ぶというものだ。

初級者でもできるように、まずは場所や人の行動に関する設問が数題出題される。それらに答えていくことで説明すべき点が明確になり、最後には一枚の写真を英語だけで説明できるようにしていく。写真の説明時によく使われる表現も巻末にまとまっているので、この一冊だけで効率よく勉強ができる。

また、このトレーニングは試験だけに役立つものではない。絵の情報を直接英語で説明することは、日本語を介さずに英語を話すことにもつながるのだ。日本

語を介さず英語を勉強する場合、書籍でできるのはインプットがほとんどだった。日本語を介さず英語のアウトプットトレーニングができる本書は貴重な存在だろう。

秀和システム

一七〇〇円

英語の名文をなぞる

〈筆記体〉練習帳

研究社編集部編 三瓶望美／筆記体

近頃、文字入力にキーボード入力为主流となり、文章や手紙をペンなどで書くことは少なくなってきた。そのような中でこの本は、小説や戯曲、名言や評論などを筆記体で書いてみようというものだ。「筆記体など習っていない」という若い方も「懐かしい」という世代の方々もお使いいただけるよう、比較的簡単な文章から始まる。

昨今「美しく文字を書く」本は数多く出ているが、この「文字」に筆記体も入れて挑戦してみたいかがだろうか。シェイクスピアの心踊るような名文をさらさらと書く姿を想像してみたい。脳トレや手紙などにも。

研究社

一〇〇〇円

今月の
おすすめ

児童書

カルペパー一家のおはなし

マリオン・アピントン文

ルイス・スロボドキン絵 清水眞砂子訳

紙を切り抜いて作られた紙人形のカルペパー一家は、持ち主である少女デビーのお部屋で様々な冒険を繰り広げます。栗の代わりに本に挟まれてしまったり、ねずみやくもと遭遇したり、ドアの間隙をくぐり抜けて初めて外の世界を知ったり、温かな仲良し一家のゆかいで楽しい毎日を描いたお話です。

瑞雲舎

一五〇〇円

300年まえから伝わる

とびざりおいしいデザート

エミリー・ジェンキンス文

ソフィー・ブラツコール絵 横山和江訳

ブラツクベリー・フルという昔からイギリスの家庭で作られてきたデザートを軸にした、四つの時代の四つの家族による四つの物語です。お菓子作りの道具

である泡だて器の変遷を辿りながら、同時に奴隸文化など各時代の様子も描かれています。家庭で作る甘くておいしいデザートを通して、人と人とのつながりを描いた絵本です。

あすなる書房

一六〇〇円

ボノボとともに 密林の闇をこえて

エリオット・シュレーファー著

ふなとよしこ訳

コンゴに生息するヒトに一番近いサルといわれるボノボ。アメリカからやってきたソフィーは路上で不当に売られていたボノボを目にし、自分がお金を払うことで助けようとしています。オットーと名付けた小さなボノボの命が助かった一方、それがさらなる密猟の横行につながることを知ったソフィーは次第に母が尽力する保護という仕事へ関心を持ち始めます。しかし大統領の暗殺から突如始まった内戦。ソフィーはオットーと共にボノボたちの世界、密林の奥へと逃げ込みます。

福音館書店

一六〇〇円

いっしょに読んだものがたり

リチャード・ジョーゲンセン文

ウオーレン・ハンソン絵 きくたようこ訳
お父さんとひとつの椅子にぎゅうぎゅうにすわっていっしょに絵本を読む、それがわたしの最高のとき。いっしょに物語を味わうことができる喜び。共有した時間は何物にも代えがたく、心に残る幸福な時間は大人になってもきつとその人を支え続けてくれることでしょう。

バベルプレス

一三〇〇円

ランドルフ・コールデコット

疾走した画家

レナード・S・マーカス著 灰島かり訳
ランドルフ・コールデコットはイングリッシュのチェスターで生まれました。銀行に勤めながら絵を描き、それは趣味の範囲を超え、線描の力を認められて新聞の挿絵を描くようになります。ユーモア・風刺・動きのある絵、コールデコットの絵に対する熱意と実力は絵本でも発揮されます。のちにビアトリクス・ポターに「嫉妬しながら賞賛しています」と言われました。そんなコールデコットの名は優れた子どもの本を表彰する「コールデコット賞」として残っています。

BL出版

二八〇〇円

A T I O N

<p>丸善 名古屋本店 ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 名古屋栄店 ☎(052)212-5360 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 名古屋セントラルパーク店 ☎(052)971-1231 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ロフト名古屋店 ☎(052)249-5592 [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店 名古屋店 ☎(052)589-6321 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN 岐阜店 ☎(058)297-7008 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN 四日市店 ☎(059)359-2340 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 滋賀草津店 ☎(077)569-5553 [営業時間] 10時～22時</p> <p>MARUZEN 京都本店 ☎(075)253-1599 [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 京都店 ☎(075)252-0101 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 高槻店 ☎(072)686-5300 [営業時間] 10時～22時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 梅田店 ☎(06)6292-7383 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 関西国際空港店 ☎(072)456-6486 [営業時間] 7時～21時半</p> <p>丸善 八尾アリオ店 ☎(072)990-0291 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 高島屋大阪店 ☎(06)6630-6465 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 大阪本店 ☎(06)4799-1090 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 難波店 ☎(06)4396-4771 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 天満橋店 ☎(06)6920-3730 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 上本町店 ☎(06)6771-1005 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 梅田ヒルトンプラザ店 ☎(06)6343-8444 [営業時間] 11時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 近鉄あべのハルカス店 ☎(06)6626-2151 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 西宮店 ☎(0798)68-6300 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 芦屋店 ☎(0797)31-7440 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 神戸住吉店 ☎(078)854-5551 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 三宮駅前店 ☎(078)252-0777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 三宮店 ☎(078)392-1001 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 神戸さんちか店 ☎(078)335-2877 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 舞子店 ☎(078)787-1250 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 姫路店 ☎(079)221-8280 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 岡山シンフォニービル店 ☎(086)233-4640 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN 広島店 ☎(082)504-6210 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 広島駅前店 ☎(082)568-3000 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 高松店 ☎(087)832-0170 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 松山店 ☎(089)915-0075 [営業時間] 10時～21時</p> <p>MARUZEN 博多店 ☎(092)413-5401 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 福岡店 ☎(092)738-3322 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 大分店 ☎(097)536-8181 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN 天文館店 ☎(099)239-1221 [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店 鹿児島店 ☎(099)216-8838 [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 那覇店 ☎(098)860-7175 [営業時間] 10時～22時</p>
--	--	---	--

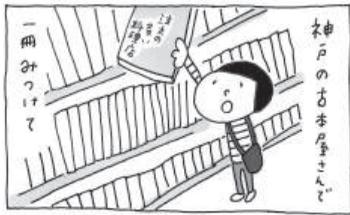
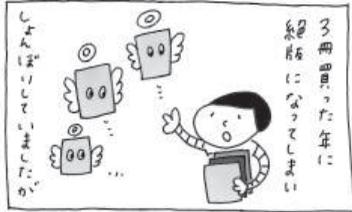
INFORM

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>MARUZEN ＝ 札幌北一条店 ＝ ☎(011)232-0222 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～金10時～20時半 土10時～20時 日・祝10時～19時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時半～21時</p>	<p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 弘前中三店 ＝ ☎(0172)34-3131 [営業時間] 午前10時～ 午後7時</p>	<p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>丸善 ＝ 横浜ポルタ店 ＝ ☎(045)453-6811 [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝10時～20時</p>	<p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時、 土・日・祝10時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 新宿京王店 ＝ ☎(03)5321-4685 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 仙台TR店 ＝ ☎(022)265-5656 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 松戸伊勢丹店 ＝ ☎(047)308-5111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 月～土10時～23時 日・祝10時～22時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 岡島甲府店 ＝ ☎(055)231-0606 [営業時間] 10時～19時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 渋谷店 ＝ ☎(03)5456-2111 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 10時～20時</p>	<p>MARUZEN ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p>
<p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p>	<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p>

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



編集後記

今月号の校了日に英国の国民投票でEU離脱が決定したとニュースが流れた。今後店頭に届くころにはどんな影響が出ているかと案じている。

(司)

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係

TEL〇三―15956―6111

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二〇〇円(送料込)

現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

丸善ジュンク堂書店特急便係

TEL〇三―15956―6111

FAX〇三―15956―6100



QRコード

PC・スマートフォンから
<http://www.junkudo.co.jp/>



「浅く広くそして 好奇心は尽きず」

いつもあらゆるジャンルのたくさんの方に囲まれているためか、好奇心が全く尽きません。本を読んで興味が湧き、またはタイトルを見て気になり、そして装丁で心惹かれるなど、日々出勤する度に「知りたい」という欲求を刺激されます。

そのためかOFFの時も、見るものや聞くもので興味がそそられるものに出会うと調べる癖ができました。今回は最近気になって調べたことを発表させていただきます。と言いましたが、タイトルにあるように「浅く広く」が性分ですから（深めようとすると、なぜか別のもの）に好奇心が出てくるんですよ……、「浅いな」と感じて頂けたら幸いです。

「シダが生えた木」

公園を散歩していると大きな木の幹や

枝からシダが生えていました。ちよつとはなく、割りとびっしりシダが出ていて、「このまま（シダが）全部覆うか」と言わんばかりの状態です。「シダを生やす樹木が日本にあったのか」と思い、写真を撮って帰宅後樹木ポケット図鑑をめぐってシダの生える木を調べました。その木は「楠」でした。

楠、名前はよく聞く木です。もちろん桜や杉と比べるとマイナー感があります。知名度はかなり高い樹木だと思います。なんと楠はシダを生やす木だったのか……と少なからず衝撃を受けつつシダについての記述がないか探しました。しかし残念ながらシダについては記述がありませんでしたが、自然科学書担当だったことを活かして（シダのみ扱った図鑑や専門書があります）、なんと特定することができました。

楠に生えるシダ、それは「ノキシノブ」だそうです。大きくて年を経た楠に着生するそうです。

次に「これもなぜなんだろう」と気になり調べていることを上げます。

「日めくりカレンダーの元号・大正、昭和の表記」

昔からある日めくりカレンダーですが、たまたまじっくり見る機会がありまして、その時視界に飛び込んできたのが「昭和九十一年」（大正もあり）という表記でした。下に平成の表記もあり、もちろん西暦も載っています。なぜ昭和が続くのか、気になります。

「ライオンとトラ」

三回見ました。やはり目の錯覚でなく、同じ空間に、そして仕切りなどなく、複数のライオンとトラがともくつろいだ様子でいます、寝ている様子はいかたかです。もちろん日本です。とても気になりましたが、時間がなくスタツフの方に質問できず残念です。さすがに本にも載っておらず、また行かねば、と思うこの頃です。

（字弁似）

「書標 ほんのしるべ」 第452号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 (株)丸善ジュンク堂書店

印刷所 (株)七 旺 社

〒160-0008

〒653-0013 東京都新宿区三栄町二十九
神戸市長田区一番町二丁目一

二〇一六年七月五日発行 頒価五十円（本体四十六円）

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2016年7月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第452号）



日本全国で
3,000万冊の品揃え!
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN